

## 開原成充さんを偲ぶ

「ひとこと」は追悼文を書くためのものではないが、このところ友人の逝去が続いているため、今回も故人の思い出などを書くことにする。

開原成充（かいはら・しげこと）さんは、私の高校時代の同級生で、1955年(昭和30年)4月に東大教養学部と一緒に入学した人だ。開原さんは医学部に進学して、内科医になったが、若いころから医療情報の組織化を専門とするようになり、医療情報学のが国のリーダーになった。東大附属病院中央医療情報部長や附属図書館長を務め、東大を定年で退職してからは、国立大蔵病院院長を勤めたが、2003年から国際医療福祉大学副学長となり、大学院長も兼務していた。

開原さんは、去る12日午後1時過ぎごろ、国際医療福祉大学で自らが主宰する会議の席上、突然倒れた。急遽同大学附属の三田病院（この病院は私の自宅から遠くないところにある）に運ばれて、病院の総力を挙げての治療が行われたが、その日の午後8時ごろ永眠した。病名は解離性大動脈瘤だった。これは突然起こる怖い病気で、診断が難しいものだそうだ。

本来、開原さんは循環器系を専門とする内科医だったので、彼は自分が専門とする領分の疾患によって命を奪われたことになる。医者は自分の専門の病気に敵を取られることが多いということを、私は開原さん自身から聞いたことがある。これを聞いた

のは、かなり昔のことで、やはり医師だった彼の父君が心臓疾患で亡くなった後のことだったと思う。開原さんは自分がそうなることを予感していたのだろうか。

お通夜は16日(日)の午後6時から、葬儀は17日(月)の午前11時から行われた。会場は、いずれも増上寺境内にある増上寺会館だった。私はお通夜にのみ出席し、葬儀には失礼した。16日は寒い日で、夕刻の気温は5℃以下になっていたようだ。その寒さの中で、お通夜に参列した人は多数に上り、開原さんの交際範囲の広さをうかがわせた。

会館にはいくつかの部屋があり、それらに用意された座席は満席で、更に、寒い夜空の下に長い人の列ができていた。参列者総数の正確な人数はわからないが、千人を下ることはなかっただろう。この状況を予想して、私は早くから出かけ、300人ぐらいを収容する主会場内に座ることができた。

お通夜の席上での開原夫人の挨拶によると、開原さんは常々仕事に倒れた人のことを羨ましく思い、自分もそうなりたと言っていたそうだ。まさにそのとおりになったのだから、彼も本望だったろう。私が奇妙に思ったのは、彼が人間ドックはもちろん、簡単な健康診断も一切受けていなかったということだ。理由は、受けると必ず何かが見つかるので、その後びくびくしながら生きることになり、それはまっぴらご免だということだったそうだ。医者の不養

生という諺のとおりだったのだが、これは医療情報学のリーダーには似つかわしくないものだ、

開原さんは、他人の健康に関する相談には親身に対応していたようだ。元々優しい性格で、多くの人たちから頼りにされていた。私も、今から10年ほど前に開原さんが大蔵病院長のとき、私の知人の医療上の問題のことで、彼から他の大病院の院長に直接掛け合ってもらって、問題を解決してもらったことがある。こういうときには、交際上手でもあった開原さんは頼りがいのある人だった。そういう開原さんが自分の健康維持に無頓着であったとは、私は不思議でならない。もっとも、気をつけていたとしても、今回の解離性大動脈瘤を防ぐことはできなかったかもしれない。

私が、開原さんと親しく付き合ったのは、1955年からの2年間、つまり私たちが東大教養学部学生だったときだ。私たちは化学部というサークルに属していた。貧弱な実験室で、当時の新しい分析手法だったペーパークロマトグラフィーに関する実験を熱心に行い、1956年秋の駒場祭（旧制第一高等学校以来の伝統を継ぐ教養学部の学園祭）に展示した。そのなかで、私は開原さんの能力の高さに注目した。実験結果に変なことがあって、私たちは困っていた。何回も同じことが起きてから、彼はその原因を推定したのだが、結果的にそれは正しい指摘だということがわかった。現象の帰納によって本質をつきとめる分析能力は実験科学者に不可欠な資質である。私は彼に一目置く気持ちをもった。

開原さんは頭の良い学生だった。彼は理科2類（進学先は医(薬を含む)・農・理の各学部）、私は理科1類（進学先は工・理）の学生だったので、同じ講義を聴く機会はあまりなかった。しかし、2年目後半の第4学期に、私は専門科目のひとつとして生物学概論を受講したのだが、その講義に開原さんも出ていた。ある日、私は何らかの原因で欠席し、あとで彼のノートを見せて

もらった。彼のノートは簡単なメモのようなもので、書き写しただけでは意味がわからず、私は彼に説明を求めたのだが、そのときの彼の説明がよくわかるものだったことに私は感心した。これならば、講義に出ないで、開原さんから教えてもらう方が良いとさえ思った。

東大教養学部では、進学振分けという制度があり、これは形を変えつつ現在でもある。要するに、教養学部に入學した学生は、2年生の半ばに、2年後期以後の進学先を決めるのだ。ある学部のある学科に進学することを志望する学生の数とその学科の定員を超えると、教養学部でのそれまで成績の平均点が上位だと有利になる。これは、学生にとっては大変なことで、志望者が多い学科に進学したいと思うと、入学試験並みの試験勉強をしなければならない。

私の場合は、理学部化学科に進学するつもりだったが、当時化学科は人気学科のひとつで、かなり高い平均点を取っていることが必要だった。2年生の5月ごろ、1年生での成績の平均点と席次が各学生に知らされた。今でも平均点は知らされているに違いないが、席次まで知らせているかどうか、私は知らない。私が学生だったころの教養学部の制度の多くは旧制第一高等学校時代のものを踏襲していたので、席次まで知らされた。つまり、私の場合で言えば、理科1類の約500人（当時）のうちで、自分が何番かが知らされたのだ。

私は、1年生のときの第1学期の成績があまり良くなかったと自分で思っており、第2学期の期末試験のために懸命に勉強した。その効果はてきめんで、かなり挽回したと思っていた。2年生になって、5月ごろ、平均点と席次が知らされたのだが、その結果は予想していたよりも良く、化学科進学は大丈夫ということになった。私はホッとした。

そのあとで、私は化学部の部室に行った。昼休み時間にはそこで持参した弁当を食べていたので、その日もそうしたのだが、そ

---

ここにやはり日比谷高校以来の友人のA君が来た。A君は、開原君と同様、理科2類（理2、学生数は当時約370人）の学生で、医学部進学を志望していた。A君は、私に向かって、ニヤニヤしながら、「理2のトップが誰かわかったよ」と言った。私が「誰なの？」と尋ねたとき、開原君が入って来た。A君は開原君に向かって、いきなり「君、トップだっただろう？」と言った。開原君は目を丸くして「何故わかったの!？」と尋ねた。それに対して、A君は「僕が2番だったから、トップは君しかいない」とズバリと言い切った。この2人の間のやり取りは、それから50数年を経た今でも、私には鮮明な記憶として残っている。結果として、開原、Aの両君はともに医学部に進学し、2人とも医学部教授になり、定年退職後には大病院の院長を勤めた。

開原さんは、医療情報学のわが国での開拓者になり、成功者となった。しかし、私は、彼には基礎医学を専門にして欲しかったと思っている。彼ほどの頭脳と実験科学者としての資質を持った人が、当時急速に発展しつつあった分子生物学に基づく基礎医学の研究者になっていれば、日本の医学はもっと進んだのではなかったかと思うからだ。最近、ES細胞やiPS細胞を使った医療技術に関する研究が盛んになっているが、これらは生命の根幹に触れるものである。医療と生命倫理の関係について問題が山積している現在、開原さんがこの分野に関係していれば良かったらと思う。

元日に開原さんから年賀葉書をもってから、僅か10日ほど後で、彼は旅立ってしまった。その年賀葉書を見ながら、私は「君がこんなに早く逝ってしまうのなら、もう一度会っておくのだったな」とつぶやいている。（おわり）